

天地

ネットワーク テーブル 476号

天地シニアネットワーク 2018年8月2日

T E N T I T O D A Y			1
会員の広場			2
連載作品			2
随 想	ブドウ栽培奮闘記 (1)	森永善彦	2
随 想	テレビの時代 (1)	臺 一郎	3
随 想	天のわざ、地のほまれー地球を測れ、宇宙を測れ 51. 電磁気のエネルギー	伊那 闊歩	5
回 想	「住民運動・横浜新貨物線反対運動」(二)	宮崎 省吾	8
旅行記	そうだ京へ行こう・古刹の花物語 (48) 洛中・知恩院	大竹 漢洲	11
回 想	「思えば遠く来たもの」(2)	津田 孚人	14
講演会	「奈良興福寺文化講座」「新三木会」		16
事務局			16

T E N T I T O D A Y

暑中お見舞い申し上げます

猛暑がどこまで続くのか心配になりますが、自衛するしかなさそうです。ただ自衛するも限界があります。互いに助け合い思いやって秋を迎えたいものです。

夕方の千代田線、乗ると若い女性が<どうぞ>と席を代わってくれました。女性が降りるときに<どうもありがとう>と礼を言うと<気を付けてお帰りください>と返されました。ちょっとしたことでも見ず知らずの人からの親切、思いやり、嬉しいものです。気分よく夕食のビールが飲めました。

循環器病院の待合室で年配の女性、何回も「長谷川さん中へどうぞ」と呼ばれますが一向に動じません。しばらくして看護師さんが出てきて「長谷川さん」と女性に直接声をかけると、「わたし、長谷川でしたよね」と立ち上がりました。周囲の雰囲気は、静まり一瞬止まった感じでした。

早寝、早起きの友人、久しぶりにご長男と昼下がりのワインを楽しんだそ

うです。夕方、5時ころに就寝、目が覚めると時計は7時。奥さんの「朝じゃない」の声を振り切っているいつもの早朝ウォーキングに出発、空は暗く、変だなと思いつつも10分ほど歩き、そこでやっと<夜の7時>と気が付いたそうです。飲み過ぎのせいでしょうが、目覚めて、夜、朝間違えることは、時にありますので、笑わずに聞いていました。

会員の広場

広島などの思い出話拝見しました。そういえばカープへの寄付金のドラム缶が市内にありましたネ。また、広島へ行ったら飲み屋やタクシー内でカープの悪口は決していわないように「経験者」に忠告をもらったことを思い出します。ご紹介のむかしの広島空港は出発がよく（良く？）遅れてくれてなんとか最終の出発に間に合ったことが何度かありました。（中島康典）

日大のアメフトに続き、ボクシング連盟がマスコミの集中砲火を浴びています。二つとも、トップの人的な問題が標的になっています。前に、日大一関学戦のレフェリーにも問題があるのではないかと、苦言を提しましたが、今回のボクシングも、レフェリーが全く機能停止状態で、ふつうであれば試合が成立しません。したがって問題はもっと早く発覚したのではないのでしょうか。

アメフトの審判は、20年以上のベテランと新聞にありました。多くの人が異常としたあのラフプレーを、異常と判断しないところに、審判としての判断力の弱さを感じられます。どんなスポーツでも、審判がいなくては成り立ちません。審判は、厳正中立、公平な判断力を持った人がする、というコンセンサス造りが改めて必要です。競技団体が個別にやるのではなく、全スポーツ団体が集まって決定し、審判の権威づけをしたらよいと思うのですが（津田）

連載

ブドウ栽培奮闘記 (1) 森永善彦

5月の始めに第1回目の寄稿で自己紹介を致しました仙台の森永善彦です。今回は3年前から始めたブドウ栽培を話題にしようと思います。

2009年6月に仙台に移り住んで来て、飼い犬がいたので郊外の庭付き1軒家に住み始めました。折角庭があるので色々と園芸を楽しむ事にして、花を植えたり野菜を育てたりしていましたが、トマトやキュウリ等は自分で手間暇かけるよりはスーパーマーケットで安価に入手出来るので、収穫してもそれほど達成感は有りませんでした。

色々な果物を食べるのが好きなので、4年前に何か果物を育てようと思い立ちました。色々考えましたが、スーパー等で見るとブドウは高級な物は一房何千円もする物があり、育て甲斐が有りそうです。早速本屋でブドウの栽培の教本を買い込みブドウの栽培について1から勉強を始めました。

ブドウの栽培は苗を植え付け、果実を収穫するまで結構手間暇がいる事が分かりました。しかし持ち前の何でもまずはやってみようの精神と、ビジネ

スから引退して時間はたっぷり有るので兎も角ブドウ栽培に取り組む事にしました。

先ず教本に載っていたブドウの苗販売業者（山形県上ノ山市の中山ブドウ園）に連絡を取りカタログを送って貰いました。扱ひ品種は良く知られた巨峰、ピオーネ、マスカットから聞いた事の無い品種まで 90 種類位載っていました。どうせならありきたりの巨峰とかピオーネでは無く他の品種にしようとかatalogをじっくり眺めていると、最近品種改良で作られた“ベニバラオー”と言う品種を苗業者中山ブドウ園がカタログの中で、“栽培容易・鮮紅色で食味極上”と推奨していました。

顆粒は大きく甘みが強く、各地のブドウ栽培業者からも注目を浴びていて、これから日本中に栽培が増えて行くと謳われていました。

中山ブドウ園の言葉を信じて、ベニバラオーと言う聞きなれない品種を育てる事に決めて、早速カタログに同封されていた注文書で苗を 1 本（4000 円）注文しました。

これが 2014 年 8 月でその年の 11 月末 30 センチ位の細い根が何本もついたベニバラオーの苗が 1 本、土無しでビニール袋に包装されて届きました。

育て方については苗が送られてくるまでに色々検討し、まず何処に植えるかを考えましたが、プランターでも育てられるとの事が分かったので大きな円形の木製のたらいの様なプランターをホームセンターで購入し、これで育てる事にしました。

通常新しい苗は春から育成を始めるそうで、翌年春まではプランターに仮植えして（プランターに斜めに置いて土を掛ける）越冬させる事にしました。プランターを置く場所は、1 階の和室の南側に 2 坪ほどの樹脂製の屋根のあるウッドデッキがあるのでそこに決めました。

次回から具体的な栽培の奮闘物語りにについてお話ししたいと思います。

随筆風「1950 年代の僕と街」（14）

臺 一郎

テレビの時代（1）

日本でテレビが本格的に普及し始めたきっかけの一つは、今上天皇が皇太子だった昭和 34 年 4 月、現皇后陛下の美智子妃殿下とご成婚、婚礼の儀や馬車パレードの様子がテレビ中継されたことだろう。わが家にテレビが来たのはその 1 年ほど前の昭和 33 年の春ごろか。東京でも割りと早いほうだったと思う。その年の白黒テレビの普及率は 10%。その前年の 32 年が 8%。ご成婚の中継があった 34 年は一挙に 20%へと跳ね上がった。普及率はその後毎年大幅な上昇が続き、東京オリンピックが開催された昭和 39 年には 90%を超えて実質的に全国の全世帯にテレビが普及した。

テレビ番組の中には、少年・少女が楽しめるものも沢山あった。その面白さは圧倒的で、ラジオの比ではなかった。特に昭和 30 年代半ばに NHK 教育、フジテレビ、日本教育テレビ（現テレビ朝日）が開局して、首都圏では 6 局体制となつてからは視聴率争いが激しくなり、各局が数字（視聴率）の取れる番組制作・番組編成を目指すようになった。こうした競争により、テ

レビは断トツで＜娯楽の王様＞となっていった。

昭和 30 年代の半ば頃までに僕達少年が良く観た番組は、クイズ番組、スポーツ番組、内外のテレビ映画番組、音楽・バラエティ番組などだった。

クイズ番組では、司会の高橋圭三アナウンサーによる『事実は小説より奇なりと申しまして・・・』という語りで始まるNHKの「私の秘密」や、同じくNHKで小川宏アナウンサーが司会をして、柳家金五郎と水乃江滝子がレギュラー回答者だった「ジェスチャー」などを良く観た。スポーツ中継番組では、巨人戦などの野球中継、プロレス中継、大相撲中継などを良く観た。昭和 30 年代のプロ野球には、国鉄スワローズ、毎日オリオンズ、東映フライヤーズ、大洋ホエールズなどのチームが存在した。国鉄がチームを所有していたのも面白いし、新聞社、水産会社、映画会社などがチームを保有していたのも時代を反映している。プロレスでは何と言っても力道山の空手チョップや対ルーテーズ戦が大人気だった。大相撲はNHK以下、在京のキーステーションのうちNHK教育を除く 5 局全てが中継するほどの人気で、一時は、幕内以上の取り組みとなる＜中入り後＞の時間帯ほどのチャンネルを回しても相撲という時期もあった記憶がある。

米国テレビ映画の日本語吹き替え版の放送は、テレビならではの番組で毎週夢中で観た作品が幾つもある。「名犬ラッシー」、「ハイウェイパトロール」、「ビーバーちゃん」、「モーガン警部」、「名犬リンチンチン」、「ローハイド」などだ。テレビ映画と言え、国内で制作された『月光仮面』も僕のお気に入り番組だった。ホンダのオートバイ「ベンリー号」に乗って現われ、悪党ドロクロ仮面をやっつける。そのストーリー展開は子供心にもワクワクした。もっとも今考えると何故？と首をひねる点もある。月光仮面はその主題歌『月光仮面のおじさんは正義の味方よ、良い人よ』からも明らかのように、＜おじさん＞である。なんで＜おにいさん＞ではなくて＜おじさん＞なのか。夢中で観たのは主に小学生だから、＜おにいさん＞の方が良かったのではないか。超高齢社会で人手不足の昨今なら、月光仮面は＜おじいさん＞や＜おばさん＞でも良いのかも知れないが。

さて、音楽バラエティ系の番組では、『シャボン玉ルルルル、シャボン玉ララララ』というオープニング・ソングで始まり、ザ・ピーナッツ、クレイジー・キャッツ、青島幸男などがレギュラー出演したシャボン玉ホリデーを良く観た。この番組は学校のクラメートも殆どが観ていて、クレイジー・キャッツや青島幸雄の、『ガチョーン』だの『谷だ、青島だ』などのギャグフレーズを休み時間や通学時に良く皆が真似た。ラジオの時代と違って、歌手やタレントの顔や姿を動画でしっかり観ることが出来たので、自分の好みの歌手やタレントを、唄や芝居の上手さ、或いは楽曲のメロディや歌詞の良さだけでなく、ルックス、ファッション、スタイルなどでも選ぶ傾向が強まっていった。

娯楽番組ではないが、日曜日の朝、6 チャンネルの時事放談も良く観た。この番組は今もやっている。当時は政治評論家の細川隆元と元日経新聞社長の小浜利得が時の政治課題や政局について好き勝手な話をした。細川隆元が時の総理大臣の佐藤栄作のことを『佐藤君は』と君付けで呼んだり、小浜氏が五木村のことを「ごきそん」と読み、細川氏に注意されたのは子ども心にも面白かった。

天のわざ、地のほまれ
—地球を測れ、宇宙をはかれ—

伊那 闊歩

51. 電磁気のエネルギー

エネルギーとは「仕事をする能力」であって、それは様々な形態たとえば「力学的エネルギー」「熱エネルギー」「化学エネルギー」「電気エネルギー」「核エネルギー」…等々をとって世に現れることを第 25 回で論じた。

「力学的エネルギー」については、ある物体に力を加えて移動させた時「物の移動距離と移動方向への力の成分との積を力が物に為した(加えた)仕事」と定義したのであった。エネルギーを測る単位はジュール(J)で、それは「物体を 1 N(ニュートン) の力で 1 m(メートル) 動かす仕事量」に相当する。

1 J = 1 N · m 。 1 ジュールは、地上で蜜柑 1 個(102 グラム)を 1 メートル持ち上げる時に費やすエネルギー量に相当するのであった。

一方、水中で羽根車を回転させれば水温があがる。羽根車の回転エネルギーが熱エネルギーに変化し、それを水が吸収したためである。熱エネルギーの単位はカロリー(cal)で「1 カロリーは、1 気圧下で 1 グラムの純水の温度をセ氏 14.5 度から 15.5 度に高めるのに要する熱エネルギー」と決められている。

熱エネルギーと力学的エネルギーの間に、はたして厳密な関係が成り立っているものかよくわかっていない時代(19 世紀初頭)にあって、英国の醸造家ジェームズ・プレスコット・ジュール(1818-1889)(*1)はひとり羽根車の実験をつづけ、1843 年(現代の単位に換算したとして)1 カロリーは 4.5 ジュールに相当することをつきとめた。理科年表によれば、1 カロリー = 4.184 ジュールをカロリーの定義値としている(*2)。これを熱の仕事当量という。

鉄片に導線をつなぎ、導線の二つの端を(ボルタ)電池につないで通電してみると鉄片が熱せられることがわかっていたが、1840 年、ジュールは電流と発熱量との関係を確定しようとひとつの実験を開始した。鉄片を水中に沈め、通電して水の温度変化を観察し、鉄片が発する熱量 U を測定したのだ。その結果 1841 年、かれはジュールの法則と呼ばれる重要な法則を発見した。それは次のように記述される。

ジュールの法則：発熱量 U は電気抵抗 R 、電流の強さ I の 2 乗、そして通

電時間 t の積に比例する。

これを数式によって記述すれば、 $U = RI^2t$ となる(*3)。オームの法則： $V =$

RI を使えば、これら物理量の間関係は、

$$U = IVt = RI^2t = \frac{V^2}{R} t$$

といろいろな形に表せることがわかる。ジュールの法則は、オームの法則(当時まだ確定されていなかった)などと並んで、電磁気学のもっとも基本的な法則のひとつとなっている。またこうして発生した熱をジュール熱という。

20世紀初頭、ニッケルとクロムの合金ニクロム線が開発された。ニクロム線は電気抵抗が大きく、通電すれば大量の熱を発する。しかもわりあい簡単に製造することができる。こうして安価に電流を熱に変換できるようになった(*4)。この性質を利用して、調理器具や暖房器具、たとえば電気コンロ、トースター、アイロン、ヒューズ、半田鍋、電気ストーブ・・・等々多くの家電製品が製造され世に出回ることになった。

電流が単位時間あたりにした仕事、つまり仕事率 (dU/dt) を電力といい、 P と書く(*5)：

$$P = IV = RI^2 = \frac{V^2}{R}$$

電力の単位はワット(W)である。実用的には、電力量の単位としてとして、ワット時(Wh)やキロワット時(kWh)が使われている。

次にコンデンサを含む回路で消費される電気エネルギーについて考えよう。コンデンサに溜まる電荷 Q はコンデンサにかかる電圧(V)に比例し

$$Q = CV$$

と書けるのであった。ここで C はキャパシタンス(電気容量)と呼ばれる定数である。電荷 Q の時間変化率は電流であるから

$$\frac{dQ}{dt} = I = C \frac{dV}{dt}$$

を得て、式の変形をしていけば次式の最終項のようになる：

$$\frac{dU}{dt} = P = VI = CV \frac{dV}{dt} = \frac{1}{2} C \frac{dV^2}{dt} = \frac{d}{dt} \left\{ \frac{1}{2} CV^2 \right\}$$

この両辺を比べれば

$$U = \frac{1}{2} CV^2$$

であることがわかる。この結果はコンデンサに溜まった電荷が放電するとき

に解放される電力量である。あるいは、コンデンサに電荷 Q を溜める際に必要な電気エネルギーであるとも言える。

次に、コイルが電気回路に組み込まれているとき、その部分で消費される電気エネルギーを計算してみよう。コイルの自己インダクタンスを L とし、そこに流れる電流を I とすれば、ファラデーまたはレンツの法則によって抵抗起電力 V が生じ、それは（起電力の向きは無視してその大きさだけを見ると）

$$V = L \frac{dI}{dt}$$

で与えられるのであった。ここに消費される電力 P は

$$P = VI = LI \frac{dI}{dt} = \frac{d}{dt} \left\{ \frac{1}{2} LI^2 \right\}$$

であるから、自己インダクタンス L のコイルによって消費される電気エネルギーは（上式の $\{ \}$ の中身）

$$U = \frac{1}{2} LI^2$$

で与えられることがわかる(*6)。

ジュールは、熱の仕事当量を定める実験を、精度をあげていろいろな方法で行っている。かれは、エネルギーは物の運動や熱そして電気など姿を変えて現れるが、エネルギーは無から生ずるものではなく、また消滅するものでもなく、変化しながら確実に保存されるということを確認していたに違いない。エネルギー保存の法則こそこの世界の神羅万象を支配する最も重要な基本的法則なのだ。

(*1) ジュールは、生まれつき病弱であったため、正規の学校教育を受けることができなかったという。原子論を唱えた物理学者 J・ドルトン(1766-1844)が家庭教師であったのでかれの影響を受けたものか、熱に関する物理学に興味を惹かれたようである。ややこしい理屈を考えるよりも実験を楽しみとっていたようだ。実験に集中するあまり、家業もおろそかになりついに醸造所も人手に渡してしまったのだ。学歴がなく、アマチュア研究者であったため

学会ではあまり正当に扱われなかったが、幸いにも当時の物理学の大御所ロード・ケルビン（ウィリアム・トムスン、1824-1907）に認められ、後にはかれと共同研究するまでになった。冷蔵庫の原理を与えるジュール・トムスン効果の発見は、共同研究の偉大な成果のひとつである。もしケルビンとの出会いがなかったならば、ジュールの業績は誰にも知られず闇に葬られていたかもしれない。

(*2) 1948年の国際度量衡会議において、熱量の単位はジュールとし、カロリーは出来るだけ使わぬこととの申し合わせがなされた。栄養学では1000カロリーを1カロリーとしていたが、混乱をさけるため現今、食品にはkcalとはっきり表示されるようになっている。たとえば梅干しパック300グラム171 kcal.

(*3) 比例するのであるから通常比例定数がつくはずだが、比例定数が1になるような熱量の単位をジュールとするのである。こうして決めた熱量の単位ジュールはもちろん力学的に決めたジュールと一致する。ただし、電圧、電流、抵抗、時間の単位はそれぞれボルト、アンペア、オーム、秒である。こうして物理学に現れる単位は整合して矛盾なく決められている。

(*4) ニクロムは、製造会社の商標であるが電熱線をニクロム線と呼ぶようになり最近では、ニクロムにアルミニウムを混合して性能を高めたカンタル線が一般的になっているが、これらをも含め電熱線を一般にニクロム線と呼んで

いる。ニクロム線に電気を通すと赤熱するが、ニクロム線の熱による劣化は小さく、かなり長持ちする。

(*5) $\mathbf{P} = \mathbf{VI}$ が電力を与える基本量として定義しておいたほうが良い。こうしておくとも力量 \mathbf{U} は電力の時間積分として

$$\mathbf{U} = \int P dt = \int V I dt$$

と表せる。つまり、電圧や電流が時間変化する場合、電力量は電力の時間積分として定義すべきである。コンデンサの場合、 $I = C (dV/dt)$ であるから

$$\mathbf{U} = \int V I dt = \int C V \frac{dV}{dt} dt = C \int V dV = \frac{1}{2} \mathbf{CV}^2$$

コイルに溜め込まれたエネルギーについては、 $V = L(dI/dt)$ であるから

$$\mathbf{U} = \int V I dt = \int L I \frac{dI}{dt} dt = L \int I dI = \frac{1}{2} \mathbf{LI}^2$$

となる。ここで積分の公式 $\int x dx = \frac{1}{2} x^2$ を使った。

(*6) ここで電力量として3種類の \mathbf{U} が得られた。これらはそれぞれお互いに数式の形が違うが、すべてエネルギーを表現するものである。それぞれがエネルギーの単位をもつことを確かめておこう。物理量 X の単位を $[X]$ と書くことにする。回路に電気抵抗 R だけがあるとき

$$[U] = [RI^2t] = [\Omega][A^2][s] = [kg \ m^2 \ s^{-3} \ A^{-2}][A^2][s] = [kg \ m^2 \ s^{-2}]$$

コンデンサだけがあるとき

$$[U] = \left[\frac{1}{2} CV^2\right] = [\text{ファラド}][V^2] = [kg^{-1} \ m^{-2} \ s^4 \ A^2][kg^2 \ m^4 \ s^{-6} \ A^{-2}] = [kg \ m^2 \ s^{-2}]$$

コイルだけがあるとき

$$[U] = \left[\frac{1}{2} LI^2\right] = [\text{ヘンリー}][A^2] = [kg \ m^2 \ s^{-2} \ A^{-2}][A^2] = [kg \ m^2 \ s^{-2}]$$

それぞれの素子にたいする数式表現は異なるが、すべて同じ組み立て単位 $[kg \ m^2 \ s^{-2}]$ を持っていることがわかった。これはつまりエネルギーの単位である。ちなみに、力学でのエネルギーの単位は [力学的エネルギー] = [ニュートン][メートル] = $[kg \ m^2 \ s^{-2}]$ であった。

「住民運動・横浜新貨物線反対運動」(二) 宮崎 省吾

[本稿は、一橋大学創立150年史準備室発行[Newsletter・NO4・201

8. 3 に掲載されたもので、講演録です]

「地域エゴイズム」への居直り

私はこの運動の特徴を以下の五項目にまとめている。

- 1・運動の目的が「貨物線反対」の一点に集中、限定されていること。
- 2・「保守対革新」を棚上げし、「貨物線反対」の一点に結集する全住民を組織したこと。
- 3・敵の設定を国鉄の「横浜新貨物線計画」に、あるいはたかだか上位計画の「第三次長期計画」に限定していること。
- 4・認識の深まりや政治意識の高揚より勝ち負けに関心が集中していること。
- 5・従って徹底した「現地闘争主義」、現地で勝つことに全力を挙げていること。

「地域エゴイズム」の語感に私が全く違和感を持たなかったわけではなく、「地域エゴイズム」の何処が悪いというのか。同様の発想は九州豊前火力反対の『暗闇の思想を』(松下竜一、作家)などにみられる。

こうした構造と意思をもつ運動に対して、もっとも身近な自治体、横浜市はどう対応したか。時の飛鳥田一雄市長は、1960年代半ばから林立した革新自治体のエース中のエース保守自治体と違う住民本位の自治体を標榜していた。(当時の自治労のスローガンは「地方自治を住民の手に!」であった)。

われわれも大いに期待した。ところが、飛鳥田市長は騒音・振動などの科学的調査をしてはどうか(その上で態度を決めたらどうか)と提案してきた。飛鳥田市長は「横浜方式」と称する公害対策の提唱者でもあった。四日市コンビナートのような全面誘致でも、三島沼津コンビナートのような全面拒否でもなく、一定の公害基準を設けて起業を規制する方式である。

われわれはこれを「公害すり替え」であるとして反対した。繰り返しになるが、われわれの主張は、静かな住宅地に深夜がピークになる貨物専用線を通すという国鉄の頭のおかしさ、非常識さであり、それを公害の多い少ない

に解消されてはたまったものではない。世に全く騒音・振動のない鉄道など存在するわけもなく、今さら科学的調査もへったくりもあるものかというのが、率直な気持ちである。

既に新幹線公害は解決できない大問題になっていた。これも、国鉄の事前の説明では、「列車はひかりのようにアッという間もなく通過してしまうから、騒音・振動など感じる暇はない(同じ港北区綱島の被害者の話)」筈のものであった。それにこの「横浜方式」は、直接の権利者(支障家屋)と周辺住民を対立・分裂させるきわめて悪質な陰謀である。国鉄は権利者さえ落としてしまえば後は野となれ山となれであるから、権利者を「ご近所」「地域」から切り離し、ご自分の財産の処分はご自分でお決めにならないといけません。どんなに反対なされても最後は土地収用法でいただきます。「ご近所」や「反対同盟」は責任をとってくれませんかよ、と各個撃破に全力を挙げてくる。「横浜方式」は、国鉄が直接の権利者のみを対象とするのにたいし、逆に地権者の消滅後の周辺住民だけを対象として、公害の多い、少ないだけを問題にするのである。この両者に共通するのは「権利者」と「周辺住民」の分離・分断であり事業(の完成)を前提にしている点である。われわれはこれを「国鉄・横浜市連合軍」と呼んだ。

此所は横浜という大都会の一住宅地である。そこにはさまざまな位相を待ったひとびとが居る。宅地開発を狙っている地主、大企業やお役所のお偉いさん、右翼、左翼、保守、革新、トロッキスト、サラリーマン、アパートの経営者、専業主婦、農家、新参者、古参住民・・・

ありとあらゆる人種が居るといっても過言ではない。居ない方がおかしい。貨物線の被害は金持ちと貧乏人を差別しない。右翼もトロッキストも差別しない。老若男女も差別しない。隣にどんな人が居ようとも、火の粉は平等に降りかかる。敵が差別しないものをこちらが差別するのは愚の骨頂である。

逆に敵が差別する権利者と周辺住民をこちらが差別するのも馬鹿げた話である。かくして「貨物線反対」だけを目的とし、これに賛成する全ての住民を結集する「地域エゴイズム」・運動が発足する。この原点は全く当たり前のものであり、その正当性をなんとしても言葉にし、論理化し思想化しなければならぬ、そして「地域エゴイズム」・攻撃を撥ね返したいという想いが私の社会観と人生を変えた。

「公共性」の実態

そもそも、住宅地に貨物専用線を通すという非常識な計画が、なぜ立てられたのか。調べてみると、全長13.7kmのうち実に91.3%が横浜国際港都建設法の住居地区・住居専用地区に指定されていることが分かった。また、途中の神奈川区羽沢(高速道路第三京浜に隣接)に面積12万㎡、年間取扱高120万トンの巨大な貨物駅があることも分かった。計画と立地の無謀さはますます明らかになってきた。一体この計画は何なのか。まさか国鉄が美女を膝枕に線引きするわけもなくと、お節介にも国鉄側の必然性を追いかけてみると、実に驚くべき事実が浮かび上がってきた。

国鉄によれば、「第三次長期計画」は都市部における通勤ラッシュを抜本的

に緩和することを目的にしている。首都圏では、東海道・中央・東北・常磐・総武の客線を複々線化し通勤輸速力を倍増する。東海道では、大船一品川間に既にある貨物専用線を客用に転用し、その代わりに山側に新貨物線を作るというのである。一見もっともである。これを国鉄は車内広告などで五方面作戦として大々的に宣伝し、新貨物線に反対するわれわれを「通勤緩和に反対する」一部住民に仕立て上げる。ここでもくわしい内容の分析は省かざるを得ないが、結論的にいえばこれは嘘であり、実体はシェアの落ち込みの激しい貨物輸送の抜本的近代化計画であった。

国鉄の荷主向けPRパンフには、いつ着くか分からない「荷馬車時代」の鉄道貨物を、コンテナ化・コンピューター化・定時運行の高速フレイトライナー化などによって、それこそ抜本的に近代化する大計画であると力説している。このためには、従来の貨車の繋ぎ換えを前提にした設備は全く役に立たず、全部新設する。広大な新鶴見操車場を廃止し代わりに広大なコンピューター操作の羽沢貨物駅をトラック輸送の高速道路脇に作る。ここと既存・新設の貨物専用線との接続地点を最短距離で結ぶと現在の立地となる。単純明快すぎて、開いた口がふさがらない。通勤緩和は不要となった貨物線の廃物利用でしかない。しかも新貨物線の工事予算420億円は、通勤対策費として計上されているのである。予算の粉飾も堂に人っていて盗人猛々しいというしかない。

この厚顔無恥のペテン構造は現在沖縄で進行しつつある辺野古の新基地建設の理由付けと酷似している。政府は普天間基地の撤去に伴う唯一の移転先として辺野古をあげているが、新辺野古基地は、その全体計画を垣間見るだけで、水深の深い大浦湾に巨大な軍港と最新の(オスプレイ)ヘリ基地を含む最新鋭の総合軍事基地の新設であるのは明らかで、普天間の単なる移転先などというものでは全然ない。

米軍の近代化はロシア・中国などに比べて後れているとの批判は以前からあり、既存の基地の改善などでは達成しえない命題がまずあり、それが辺野古新基地に他ならない。そしてこの新総合基地の建設によって不要となる普天間を返還するとするにすぎない。

普天間が都市のど真ん中にある「世界一危険な基地」であることは間違いない。しかし米軍は、それが沖縄住民にとって「危険」であるという認識を持っていない。そうでなければ、住民が要求するせめて隣接する小学校や保育園の上空を飛ぶなという声を無視し続け、事故を連発させるわけがない。普天間が「危険」なのは、第一に狭いうえに拡張・改善の余地がないこと、内陸であるため軍港の機能がないなどで、基地そのものが、他ならぬ米軍にとって重荷になっていることが「危険」なのである。

同じことは、本島の北部訓練場でもいえる。ここでも最新鋭のヘリコプター訓練場、ヘリパッドの建設が至上命令であり、その新設を条件に不要になる一定面積の返還が実現する仕組みである。高江の爆音の激増はすざまじい。「横浜新貨物線」と「辺野古新基地」に共通する「公共の福祉」の増進のための公共事業の「住民無視」・「住民不在」は健在である。

「戦争は究極の公共事業」と言ったのは沖縄を訪れた元長野県知事の田中康夫氏だが、これは名言である。安倍首相は、「国の役割は国民の生命、財産と幸せな生活を守ること」だと言う。そのために国を守る「安全保障」が大

事であり、「公共の福祉」のためにさまざまな「公共事業」が必要であることになる。これが「住民無視」・「住民不在」の上に成り立っていることは既に述べた。住民の反発・抵抗は必然である。

＜そうだ京へ行こう・古刹の花物語＞（４８）

大竹 漢洲

洛中・知恩院

中学生の頃の日本は未だ貧しかった。あの頃の一般家庭で、家族揃って遠出の旅をすることは皆無であり家族で出掛けるにしても、帰省する程度が精一杯の時代でした。千代田区立一ツ橋中二年生の秋に、京都・奈良に修学旅行をしています。戦後間もない頃で学生数も多く、一学年の生徒数が700名もいた記憶があり、当時は今と違って新幹線のような大量交通機関も無く、団体で旅するのは奇跡に近い時代でした。大勢の友人たちと、初めて経験する遠距離の旅でした。無邪気な少年でしたので親しい級友と一緒に行ける未知の旅に、夢と期待で一杯でした。東京から修学旅行専用列車で京都まで時間が掛かったことは現実ですが、記憶は全くありません。不思議です。時間の経過が濃密であったに違いありません。

東海道新幹線が開通したのは、昭和39年で東京オリンピック開催の年です。東京芝浦電気（東芝）に入社した年でもありました。父親の電線会社が新幹線の架線を納入していた関係で、開通前に三島から静岡まで試乗することができました。記憶に残る印象は“速かった”ことです。その時は新幹線が日常的な交通機関になるとは夢にも思いませんでした。今から振り返ると、高校受験に失敗した旅人にとって、修学旅行は唯一中学時代の楽しい思い出として強く印象に残っています。修学旅行の旅程表や旅日記は手元に残っていませんが、級友たちと撮った記念写真は大切に保管しています。写真で楽しかった旅の記憶が蘇ってきます。

京都の宿泊先は、「日昇館別館」でした。大広間で舞妓さんたちが「祇園小唄」の唄に合わせて舞ったこと。「清水寺」の舞台から京都市内の景観を眺めて感動したこと。「八坂神社」から円山公園を抜けて「知恩院」の巨大な山門を見上げたこと。当時の東京は大空襲で焼け野原の跡がまだ残り、戦後復興の途上にあり、巨大な木造建築物を目にすることは皆無の頃でした。京都に残る数々の木造建築に驚きを感じました。何故か「知恩院」の印象だけが未だに強く残っています。知恩院の御堂の廊下が「鶯張り」であること、大屋根の軒裏に「忘れ傘」を見上げたことでした。太平洋戦争の傷跡が残っていた東京では、決して目にすることのできない平和な世界が、京都にはあったことを実感した旅でもありました。

しかし実際は京都も長い歴史の中で度重なる戦火に見舞われた都であったことを知るのは未だ未だ先のことです。円山公園の北に位置する知恩院は、三門の大きな屋根が森の中からそそり立つように姿を見せてきました。タクシーから降りて、石段の下に立って見上げると、巨大で堂々とした古武士の風格が備わった三門です。徳川秀忠公が建立した高さ24m・幅50mもあ

る日本最大の木造二重造りの三門です。

最近三門と山門とが混同して用いられていますが、三門とは悟りの境地に到る三解脱門「空門」「無相門」「無顧問」を表しています。知恩院は浄土宗の総本山であり、開祖法然上人が入寂された遺跡に建てられた由緒ある寺院です。浄土宗には四ヶ本山と呼ばれる寺院があります。知恩院、清浄華院、金戒光明寺（黒谷）、知恩院（百万遍）で、知恩院の造作は、他の三寺院に比して抜きんできています。理由は、知恩院は徳川幕府から保護を受けた寺院でした。

三門から伽藍までは長い石段が続いています。頭を下げて威圧感で首を竦めるように三門を潜ると、急な石段が容赦なく迎えました。病で弱った体には厳しい階段です。上っては一休みしながら大伽藍に上り詰めました。

東山を背にして「法然上人御堂」「御影堂」「阿弥陀堂」「御廟」の建物群が並んでいます。法然上人の御尊像のある御影堂は現在修理中でした。修学旅行で見上げた左甚五郎の「忘れ鹿」は残念ながら目にすることはできません。

御影堂の背後に位置している御堂（集会堂）に上がりました。僧侶が集会して講座する場として集会場と名付けられています。御影堂の修理完成まで、本堂の役割を果たします。四百五十畳敷の大広間では、僧侶の読経が行われており、遠慮するように壁際を歩いて方丈庭園に向かいました。

ここの三百間の長い廊下が記憶に残る「驚張りの廊下」でした。修学旅行では大勢の中学生たちが、ドスドスンと踏み鳴らす足音で驚いた鶯は鳴き声を発しほせん。老化した旅人夫婦の踏む廊下は、心地よい鳴き声で囀っていました。

本堂に続く大方丈・小方丈は共に書院造りで、総ての襖絵は狩野派の絵師の筆によります。方丈庭園は、大方丈の南側と東側、小方丈の南側に面した瓢箪型の池を中心にした池泉回遊式庭園です。江戸時代初期に小堀遠州と縁のある僧玉淵と量阿弥の作庭と伝えられています。

寺院のスケールの大きいことは、徳川家康が軍事的な意味合いを持たせて建立した事が理由です。家康は幕府兵を収容する軍事的な施設、即ち城として転用できる規模と設備を兼ね備えた寺院が知恩院でした。「驚張りの廊下」も敵の忍者の侵入を防ぐための仕掛けとも言われています。徳川幕府だけでは無く、譜代大名も外様大名も大寺院に資金を援助して、京洛に一端事変が起これば、軍事拠点として転用できる寺院を競って建立しています。幕末の動乱時（鳥羽伏見の戦い）に各々の寺院が主役になりました。

戦国時代の武将であった信長・秀吉・家康の宗教に対する考え方には、興味深い違いがあります。信長は宗教と敵対しました。信長は現世の実力一切を支配すると考えて、一向宗の本願寺と戦うことが II 年にも及びました。長島の門徒も加賀越前の門徒も紀州雑賀の門徒も、更には 5 年間の籠城に耐えた石山寺も皆滅ぼしています。800 年の法灯を保っていた比叡山延暦寺も焼滅されています。秀吉は宗教に無関心でした。秀吉の関心事は高貴な女性のみでした。

それでは家康と言うと天海や崇伝の高僧を宗教家としてより、政治家として重用して、巧みに朝廷との関係の強かった大寺院を抑えて、権力を削いで

形骸化しています。しかも 天海は江戸上野に寛永寺の建立を進言しています。宮様を門跡として迎えることで、万一事が起こった場合にも門跡を擁すれば、朝敵にならないための備えでした。江戸時代末期の彰義隊の戦い(上野戦争)で上野の山に立て籠もったのは、幕臣たちが門跡を擁立することになりました。家康は自ら東照大権現の神になった人ですから、宗教の功罪を知り尽くし且つ利用した人物でした。

又、一昔前の戦国武将であった武田信玄と上杉謙信は、共に熱心な仏教徒で、しかも“義”ある武将でした。

修理中の御影堂の前まで戻り、右手にある石段を更に上り詰めると、左手に「勢至堂」と呼ばれる堂宇があります。法然上人が勢至菩薩の化身であるとして、弟子たちが建てた御堂で、最初は「知恩教堂」と名づけられました。現存する知恩院で最古の建物です。御本尊は勢至菩薩坐像です。勢至菩薩は阿弥陀如来に脇侍する菩薩です。知恵の光を持って遍く一切を照らし、衆生(多くの生き物・大きな人々)の迷いを除き、無上の力を得させると言う菩薩です。もうひとつの脇侍は観世音菩薩です。

勢至堂の右手奥の崖上に「法然廟」が建てられています。法然上人はこの地で亡くなり、葬られました。叡山衆徒に墓を暴かれ、遺骸が持ち去られる経緯は、西山「光明寺」で書きました。「知恩院」には七不思議があると聞きました。「鶯張りの廊下」もその一つですが、修学旅行で見上げて、はっきりと記憶している「忘れ傘」です。この傘は本堂正面の軒下に網を被せてあり、傘には「南無阿弥陀仏」の六文字が書いて火除けのお守りです。左甚五郎の忘れ傘ではありません。75歳にして、又一つ夢が破れました。

七不思議の一つとして興味深い話は「二枚瓦」です。御影堂の軒中央に二枚の瓦が置かれています。「忘れ二枚瓦」ではありません。知恩院造営に関して京都所司代から厳しい計画を突きつけられた僧侶は知恵を絞って、家康から補助金を貰い続けるために、未だ建築が終わっていない「方便」として二枚瓦を置きました。

「方便」は仏教用語です。衆生を教え導く巧みな手段であり、真理に誘い入れるために、仮に設けた教えです。この「二枚瓦」は“満つれば欠くる世のならない”として、「完成」を避けた象徴とも説明されています。

帰り際に石段の上から見下ろした三門も一興でした。大きな屋根が小さく見えるから不思議です。悦子の腕に支えられて、一步一步ゆっくり下りました。イタリアの Verona とは全く逆の状況でした。

生きていることは幸せです。明日があります。

“思えば遠くへ来たもの”(2)

津田孚人

広島カーブが日本一になった昭和50年ころの広島

1951年3月に、2年間の勤務で広島から東京に戻りましたが、しばらくの間、8月になると「広島」を思い出したものです。10数年前、大学の

バスケット部の選手に広島学院出身者がいました。8月6日の原爆記念日のことを聞くと、卒業しても現地で、12時には黙とうをするようにと学校からの指導があったということでした。＜原爆の悲惨さ、恐ろしさ、そして二度と使用されることがないようにという思い＞を次世代の若者に伝え残したいという広島の宿命、決意をその時に感じました。

毎年6日に、平和記念公園で記念式典があります。式典は、朝8時から始まり、9時、10時と日が昇る頃は大変な暑さです。8月の広島は、本当に暑い。

暑さは、半端ではありません。日中の日差しもさることながら、関東では経験したことの無い『べた凧(なぎ)』に、悩まされました。社宅は、古い二階建ての一軒家、クーラーなどありません。(当時はまだクーラーは一般的ではなかったかもしれません)。夜、ガラス戸を開けて寝ていましたが、外からの風が全くありません、関東は暑くても、夜風が若干はあります。広島の夜は、空気が全く動かないのです。寝ていても気味悪く息苦しいほどでした。

夜中に突然、顔を虫が這うように感じて慌てて叩くと、虫でなく汗が顔を流れ落ちたと気付くのです。一度、二度・・・、睡眠不足になります。

＜凧＞は、神戸転勤の折には、ほとんど感じませんでしたので、瀬戸内広島凧は、特別だったのかもしれませんが。

真夏に市内では夾竹桃を多く見かけました。放射能対策で植えられたと聞きましたが、真夏に咲くピンクの花の色がどぎつく、暑さを一層強く感じさせました。今でも夾竹桃を見ると、広島の夏を思い出します。

生活面で一番驚いたのは「マグロ」が魚屋の店頭になくことでした。全くないわけではないのですが、隅の方に申し訳程度に置いてある程度で結構高い。店頭には、瀬戸内、山陰、九州など、近海の魚、魚介類が賑わい、新鮮で種類も豊富でした。新鮮が売り物ですから「冷凍」のマグロは受け入れられなかったのでしょうか。いずれにしてもマグロで育った東京出身者には、辛いことでした。月に一回、大阪への出張がありましたので、帰りに梅田の阪急デパートに寄って冷凍のマグロを必ず買って帰り、憂さを晴らしたものです。もちろん寿司屋には、マグロはありました。出張で来る上司にごちそうになる時は、寿司屋へ行くことにしていたものです。

岡山では、＜ママカリ＞で有名でしたが、広島では＜小イワシ＞のまま割いて新聞紙に包み、路頭でリヤカーのおばさんがよく売っていました。脂がのり結構美味しいので、ときどき買って食べていました。牡蠣は、近所の方が、瀬戸内海が汚れているのであまり食べないと言うので、我が家でも敬遠していましたが、外では問題なくいつも食べていました。

広島に赴任するまで、酒は弱く、ビール1本が限界でしたが、広島は酒処ですから当然飲む機会が多くなり、ビールで始まり、日本酒、ウィスキーがコースでも最後はこなしていました。酒は慣れです。幸いだったのは中心街の流川、薬研堀通りから社宅までタクシーで5分ほどだったこと、気分が悪くなくても、すぐ家に帰り寝床につけるという安心感が支えてくれました。

それ以来、お付き合い程度は十分できるようになり、のちに営業職になっても困りませんでしたから、広島さまさまでした。

酒処は、水が良いのが大前提ですが、水が良いと和菓子がおいしいといわ

れます。もみじ饅頭は、お土産の定番でした。和菓子も、お茶処、島根の松江が有名で出張すると必ず買って帰ったものです。

仕事は中国4県が担当でしたが、経済力の一番大きい広島にすることが多く、岡山へは月1度、島根、鳥取は、2ヶ月に1度という割合で動いていました。広島は、東洋工業（現マツダ）、広島銀行、中国電力、などが代表企業で、そのほか放送、バス、など地場有力企業もありましたが、かっぱえびせん、フマキラー、など全国展開する企業も結構ありました。東京青山をはじめとしてベーカリーチェーンを展開するアンデルセンも広島が本拠地、アンデルセンがあると今でも覗きたくなります。

広島経済の中核は東洋工業、世界が注目したロータリーエンジンを開発しましたが、オイルショックでガソリン価格が高騰し、高燃費のため世に出ることはチャンスを逸しました。広島経済界が重苦しい時代でした。

一方で、日本国内の金融機関は、昭和40年代の後半あたりから大企業の資金需要が、設備投資の一巡と、資本市場からの資金調達が容易になったことから落ち始め、借入れが伸びなくなりました。金融機関は、一斉に中小企業や地方の有力企業との取引開拓に走り出しました。

生命保険会社も同様です。40年代の初めに厚生年金制度がスタートして受託代行機関となったので大量の資金が流れ込みはじめ、その運用が一大事となってきました。今まで、銀行の紹介、あるいは銀行経由で資金を企業に供給していましたが、銀行がそれどころでなくなってきたので、直接企業へ融資する必要に迫られ出しました。当時、地方の有力企業との財務取引は、ほとんどできていません。支社は保険営業、それも個人保険が中心で、財務取引の窓口にもなっていませんでした。地方の大企業でも資金の申し込み、決算説明など、支社に寄らずに本社に直接でした。したがって、地方の大企業、有力企業でも、取引の無いところが多くありました。

そこで昭和47年ごろから、大阪、福岡、札幌、仙台、広島と、地方が本社の有力企業の開拓に積極的になっていきました。

昭和49年～50年オイルショックが発生し、日本中が大混乱に陥りました。そんな最中に赴任しましたので、だいたいどこへ行っても、これからどうなるか心配をしていました。会社に入って13年、怖いもの知らずで、飛び回りました。生命保険会社の若い担当でもアポなし訪問で大企業の部・課長さんには結構会えました。この先は、次回にします。

文化講座・講演会

奈良興福寺文化講座 2018年8月9日（木曜日）

午後5時半～6時半：第一講「中金堂と法相宗」

興福寺教学部員 Saile 暁瑛

午後6時40分～7時・・・心を静める

午後7時～8時：第二講

連続講話・「奈良・祈り・心」 興福寺 貫首 多川俊映

会場：(学) 文化学園 文化服装学院内
受講料：500円 先着200名
(JR新宿駅南口、小田急線、京王線各新宿駅から8分、都営新宿線新宿駅3分)

第97回 新三木会 講演会のご案内

1. 日時・会場 2018年8月16日 13:00-15:00
如水会館 2F スター・ホール
- 2 『戦場と兵士—アジア・太平洋戦争期の日本軍』
吉田 裕氏 一橋大学大学院特任教授
3. 申込・会費 E/Mail: shinsanmokukai@gmail.com
Tel :047-464-4063
フルネーム：一般・天地シニアネットワークと伝えてください
- 4、会費:2000円 婦人1000円 学生無料
茶話会:15:15-14:20 千円 (自由参加)
5. ホームページ
<http://jfn.josuikai.net/circle/shinsanmokukai/>

6 今後の予定

- 第98回 9月20日(木) 『明治維新から150年、語り伝えたいこと』
秦 郁彦氏 日本近現代史、軍事史研究家
- 第99回 10月18日(木) 『人工知能研究の目指す処』
杉山 将氏 東京大学大学院教授、
理化学研究所革新知能統合研究センター長

事務局

<投稿歓迎><図書のおすすめ依頼>

<プリント版・郵送>

メール版(無料)を編集してプリント版を月に1回発行郵送しています。お申込みくださればお送りします。

一応、実費として1月350円(4200円/年)をいただいておりますが、強制するものではありません。

<振込先>振込先：三井住友銀行「神田支店」 (普通) 7871532
(口座名) テンチシニアネットワーク

天地シニアネットワーク・テーブル・476号

発行：2018年8月2日

天地シニアネットワーク事務局 (津田 孚人)

住所：〒116-0001 荒川区町屋3-2-1

ライオンズプラザ町屋 703

メールアドレス：tentisenior06@gmail.com

電話・FAX・03-3819-7651

携帯電話(津田)：090-2534-1316